

展勝地風土記

Vol.3

平成25年1月25日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
お問い合わせ／北上市建設部都市計画課 内線4315

展勝地開園100周年記念事業準備委員会では、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的事実、地理的事実、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。

展勝地のお宝 国見山廃寺跡

北上市立埋蔵文化財センター

国見山廃寺の新展開

―よみがえる平泉以前の仏教文化―

国見山廃寺跡は、司東眞雄先生たちによって進められた初期調査以後、大規模に発掘調査されることはなく、国見山廃寺Ⅱ定額寺陸奥国極楽寺説についても検討されることはありませんでしたが、それが大きく転換したのは、昭和の終わりころでした。

市は、国見山廃寺が重要な古代寺院跡で、文徳天皇実録に書かれた定額寺陸奥国極楽寺跡である可能性が高いとして、文化庁に国指定史跡とするよう申請書を出した際に、国の文化財保護審議委員から、文徳天皇実録に書かれた陸奥国極楽寺なのかという疑義が出たのです。まず発見された国見山の堂塔の年代が、文徳天皇実録の年代である9世紀中ごろ(1150年ほど前)のものであることを示さなければなりません。司東先生たちの初期調査は、期間も短かった上、当時はまだ出土遺物に対する年代観も確立されていなかった

め、建てられた年代まで調査が及びませんでした。

発掘調査再び

堂塔の年代を確かめるには、司東先生たちが発見した堂塔跡を再発掘して、新たに年代を明らかにできる資料を得るしかありません。そのため初期調査から20年余りの時を経て、再び国見山の堂塔跡に発掘調査のメスが入られたのでした。この調査で、国見山廃寺の変遷の謎を解く上で大きな成果を上げたのは、中心仏堂(いわゆる本堂)と考えられる七間堂と呼ばれる、国見山廃寺跡で最も大きな仏堂跡の再調査でした。再調査の結果、この仏堂は、およそ200年の間に5回の建て替えが行われていることが確認されたのです。南に傾斜する斜面を削って平場を造り仏堂を建てていたのですが、建て替えのたびに仏堂を大きくするため、斜面をさらに削り盛土整地していました。したがって、新たに盛土していくことで、古い建物の跡は壊されることなく良い状態で残っていたのでした。この中心



中心仏堂(本堂)の盛土整地(5回にわたり盛土整地され堂が造られている)

仏堂の変遷を追うことで、国見山廃寺の変遷が明らかになったのです。

国指定史跡へ

結果、確かに国見山廃寺の創建年代は9世紀中ごろまでたどることができましたが、そのころは中心仏堂とそれに付属する建物しかなく、定額寺と

平泉文化の礎・国見山廃寺

ここからは、国見山廃寺の盛衰を、この地域の歴史とからめてみましょう。なぜ国見山にお寺が置かれたのでしょうか。それは、国見山廃寺の南9キロメートルほどのところにあった胆沢城(奥州市所在)と関連があったと考えられます。胆沢城は、征夷大

しては小さ過ぎる山寺であることが分かりました。実は、司東先生たちが発見した数々の堂塔群の跡は、10世紀後半(1050年ほど前)から建てられたものでした。文徳天皇実録の記載された天安元(857)年(1156年前)とは100年近く後の時代のものだったのですが、このことにより、文徳天皇実録の定額寺陸奥国極楽寺Ⅱ国見山廃寺にという可能性は厳しくなりました。では、国見山廃寺跡は国指定史跡にはならなかったかという点、平成16年に国指定史跡となりました。それは、再調査によって明らかにされた新たな成果、奥州藤原氏以前の日本最北の本格的な山岳寺院としての価値にスポットが当たったのです。

將軍坂上田村麻呂がこの地域の蝦夷との戦いの末、中央政府の出先機関として設置した役所です。胆沢城は鎮守府とも呼ばれ、次第に役所として整備され、特に9世紀中ごろに大規模な整備が行われています。このころには、地方役所としては重要な仕事で、国家行事である仏教儀式が行われたようです。その儀式には大勢の僧侶が必要だったことから胆沢城にたくさんの僧侶がいた施設(付属寺院)があったと考えられます。当時の僧侶は、平地で儀式を行うだけでなく、山林にこもって修行する必要があり、その修行の場として、政治の場から離れた、霊験あらたかな場所が必要でした。国見山は、口内町の明神岳を噴火口とする火山の噴出物でできた岩山で、大岩が所々に露出し、霊験ある風景を呈していることや、胆沢城から北上川を隔て、程よい距離にあるなど、山林修行の場に適した場所でした。

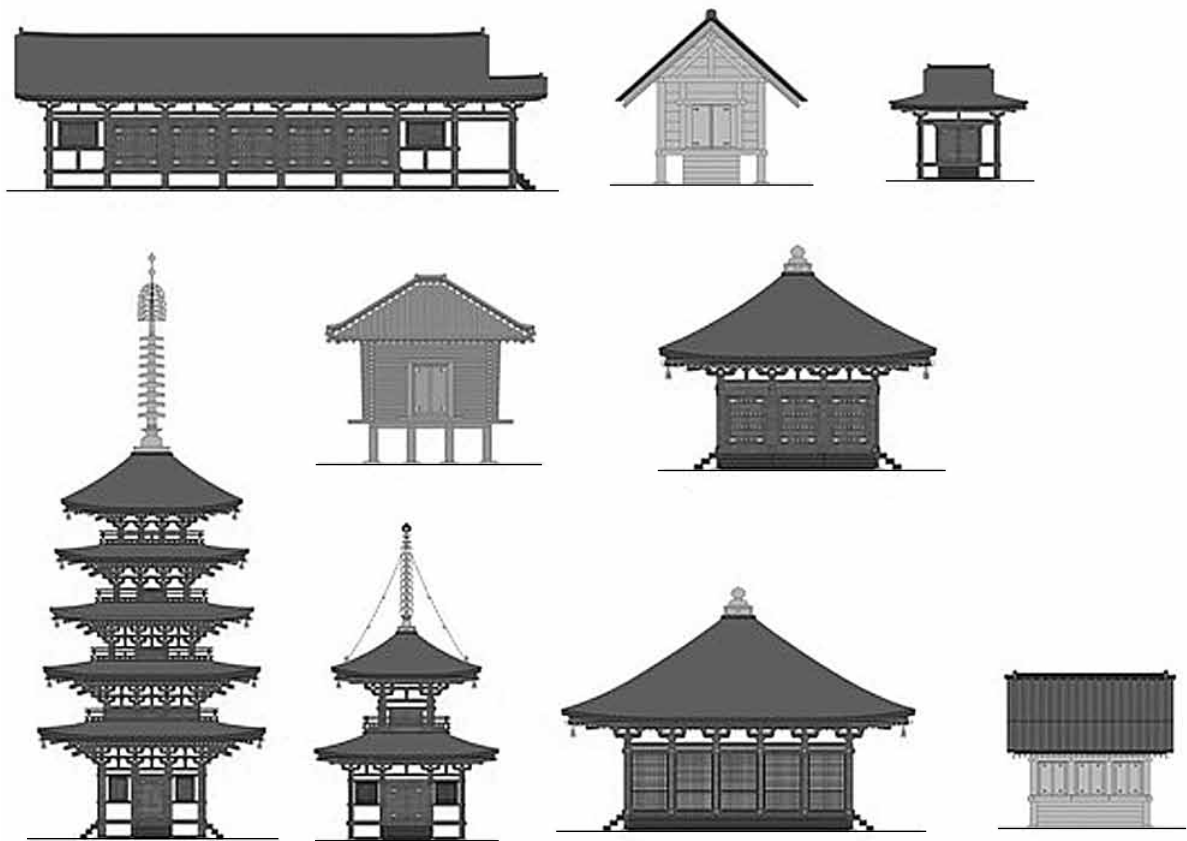
そこで、ここに修行の場として寺が開かれたと考えられますが、修行の場ですから、小さな中心仏堂一つくらいで十分だったでしょう。

この小さなお寺だった国見山廃寺が、10世紀後半から急に塔を持つような大きなお寺となりますが、胆沢城はこのころには無くなってしまったようです。では国見山廃寺を大きくしたのは誰だったのでしょうか。書物などでは、そのころ、この地域を支配したのは奥州藤原氏の父祖にあたる安倍氏、清原氏という豪族でした。

安倍氏は、胆沢城にいた役人で蝦夷出身とも考えられている豪族です。10世紀中ごろには胆沢城の支配領域を実質的に支配していました。清原氏は、もともと秋田の豪族で、前九年合戦で安倍氏を滅ぼした後、鎮守府將軍になりました。この両氏が大胆となり国見山廃寺を中央の寺院にひけをとらない大規模な寺院にしたと考えられます。この国見山廃寺の発展に大きく関わっていたと考えられる安倍氏、清原氏が滅びた後、奥州藤原氏初代清衡が政治の中心を江刺郡豊田館から平泉に移し、中心寺院として中尊寺を建立したころには、国見山廃寺の堂塔が無くなってしまいました。このことから、国見山廃寺の仏教文化こそ、平泉仏教文化の礎であったといえるでしょう。

国見山廃寺復元の試み

初代清衡が建てた中尊寺の建物がどのようなものであったのかは、現存する金色堂以外、発掘調査をしてもはっきり分かりません。ところが、国見山廃寺は12世紀ころには堂塔が無くなりそのまま埋もれてしまったので、当時の建物跡(礎石)は壊されずに残っていました。そのため、安倍氏、清原氏が建てた平泉仏教文化以前の中心寺院がどのようなものであったかが分かるのです。平成22年には、堂塔跡から建物を復元する試みも岩手県建築士会北上支部により行われ、下図のような堂塔が国見山の尾根に展開していたと思いきわることができるとなりました。



国見山の堂塔の復元図 (濱島正士監修、岩手県建築士会北上支部作成)